

「唐宋八家文読本」

◆ 雑説 ◆

語釈

* 雑説 Ⅱ 題を設けない論説文。「説」は文体の一種で、論説文を指す。

* 伯樂 Ⅱ 「伯樂」とは天馬をつかさどる星の名前で、周の孫陽が馬を見分けることに優れていたため、こう呼ばれた。転じて（馬を見分ける名人）のこと。

* 千里馬 Ⅱ 一日に千里を走ることができるといわれるような名馬。

* 奴隸人 Ⅱ 馬の世話をする使用人。

* 駢死 Ⅱ （普通の馬と）首を並べて死んでしまふの意。

* 槽櫪之間 Ⅱ かいば桶と馬屋の板の間。

* 粟一石 Ⅱ 約六〇リットルの穀物。馬の一日分としてはかなり多い。

* 才美 Ⅱ 優れた才能。「才」は「才能」、「美」は「優れる」の意。

* 材 Ⅱ 才能。「才」に同じ。

世^ニ有^リ伯^{ハク}樂^ニ然^シ後^ニ有^リ千^リ馬^一千^リ馬^ハ常^ニ有^レ而^{シテ}伯^{ハク}樂^ハ不^レ常^ニ有^ラ故^ニ雖^モ有^リ二^名馬^一祇^ニ辱^ム於^テ奴^ス隸^ノ人^ノ手^ニ駢^シ死^ス於^テ槽^ノ櫪^ノ之^間不^レ以^テ千^リ馬^一之^千里^ノ者^ハ一^食或^ハ尽^ス粟^一一^石食^マ馬^一者^ノ不^レ知^リ其^ノ能^ク千^リ而^{シテ}食^ハ也^ニ是^レ馬^也雖^モ有^リ千^里之^能食^ハ不^レ飽^カ力^不足^ラ才^ノ美^不外^ニ見^レ也^ニ且^ツ欲^ス与^ニ常^馬一^等不^レ可^レ得^ラ安^ク求^ニ其^ノ能^ク千^里也^ニ

訓読

世に伯樂有り、然る後に千里の馬有り。千里の馬は常に有れども、伯樂は常に有らず。故に名馬有りとも雖も、祇だ奴隸人の手に辱められ、槽櫪の間に駢死し、千里を以て称せられざるなり。馬の千里なる者は、一食に或いは粟一石を尽くす。馬を食ふ者、其の能く千里なるを知りて食はざるなり。是の馬や、千里の能有りとも雖も、食飽かざれば、力足らず、才の美外に見れず。且つ常馬と等しからんと欲するも、得べからず。安くんぞ其の能く千里なるを求めんや。

之を策うつに其の道を以てせず、之を食ふに其の材を尽くすこと能はず、之に鳴けども其の意に通ずること能はず。策を執りて之に臨みて曰はく、「天下馬無し」と。嗚呼、其れ真に馬無きか。其れ真に馬を知らざるか。

無^レ馬^一鳴^ハ呼^ブ其^レ真^ニ無^キ馬^一邪^カ其^レ真^ニ不^レ知^ラ馬^一也^ニ

之^ニ而^{シテ}不^レ能^ハ通^ス其^ノ意^ニ執^リ策^ヲ而^{シテ}臨^ミ之^ニ曰^ク天^下無^レ馬^一鳴^ハ呼^ブ其^レ真^ニ無^キ馬^一邪^カ其^レ真^ニ不^レ知^ラ馬^一也^ニ

■句法・語句チエツク

- ① 不_ニ常_{ニハ}… 「いつも…するとは限らない」の意の部分否定。
- ② 雖_モ… 「たとえ…としても」の意。逆接の仮定形。
- ③ 祇 「たゞ」と読み、〈ただだ…(だけ)〉という限定の意味を表す。
- ④ 於 「唯・惟・只・但」なども、限定の意味を表す。
- ⑤ 於 ここでは受身を表す置き字。「A於B」で「BニA(セ)ル・ラル」と読み、〈BにAされる〉の意味。
 受身形には「於」を用いた形のほかに、受身を表す語「見・被・為」を用いた形がある。
 ○ 「見_ニ(被・為)…」―「…らル・る」と読み〈…される〉の意。
 ○ 「為_ニA所_ニB」―「AノB(スル)ところトナル」と読み、〈AにBされる〉意。
- ⑥ 以 「もつて」と読んで、〈…によつて〉の意。
- ⑦ 安_{ケン}…也 「いづクンゾ…ンヤ」と読んで、ここでは〈どうして…だろうか、いや、…ではない〉という反語の意味を表す。
- ⑧ 不_レ能 「あたはず」と読み、〈できない〉の意。「能」を「よく」と読むときは、〈…できる〉の意。
- ⑨ 嗚呼 「ああ」と読んで、〈ああ(…だなあ)〉という感動を表す。
- ⑩ 其…邪・其…也 「それ…か」と読み、〈そもそも…か〉という疑問の意。

全 訳

世に(馬の善_よし悪_あしを見分ける名人の)伯樂がいて、そこではじめて千里も走る名馬がいるのだ。千里の馬というものはいつもいるが、伯樂はいつもいるとは限らない。だから名馬がいても、ただ使用人の手で辱められ、かえば桶_{おけ}と馬屋の板の間に(普通の馬と)首を並べて死んでしまい、千里を走る能力によって称_たえられることがないのである。

馬でも千里走るものは、一食であるいは雑穀一石を食べるかもしれない。馬を飼っている者は、その馬が千里を走ることができない(からこんなに食う)と気づいて飼っているわけではないのだ。その馬は、千里を走る能力があっても、餌_{えき}が十分でなければ、能力を発揮できず、才能の美点が表に現れない。その上普通の馬と同じようにしようとしても、そうすることもできない。(そんな状態で)どうしてその馬に千里を走る能力を求められるだろうか、いや求められない。

これ(千里の馬)をむちで打つにしても、その方法(千里馬にふさわしいやり方)をせず、これ(千里の馬)を飼うにも名馬としての才能を残らず発揮させられず、(その馬が)そういう扱いに(不満があつて)いなないたとしても、その気持ちを悟ることができない。(そんな人が)むちを手にしてこれ(千里の馬)に向かつて言う、「天下には馬がない」と。ああ、本当に馬がないのか、本当は馬を知らないのか。